ることであるからこゝにはとらぬ）以後西方諸國の佛僧が續々として支那に來り、佛典漢譯の事業も盛大となつて、其中の幾分かは、よし譯者について多少の疑問があるにしても、現に今日存在して藏經中に收められて居る、今此等外國から支那に來て譯經のことに從事した人々の國籍をしらべて見ると、葱嶺以西では天竺、月氏、兜佉勒（卽ち覩貨羅（トカラ））、安息、康居、罽賓、葱嶺以東では于闐龜茲等の諸國である、此等の外に只だ西域の人として傳へられて居るものが澤山ある、思ふに之は重に葱嶺の東、今の支那新疆省地方の人を稱したもので、于闐龜茲などの人も、一方では西域の人と云はれて居る例が少くない、支那の初期譯經時代ともいふべき羅什の前後には、實に此等の國の人が經典漢譯の事に從事した、しかし漢人で此等の人と協力し、もしくは獨立して翻譯したものも少くないので有名なる嚴佛調以下、聶承遠、其子聶道眞、竺佛念、道安などといふ人があつたことは能く知れて居ることである、以上の國々の中で佛教の本國天竺を除いては、何れも皆梵語の範圍外のものばかりである、疑問は則ち此點に向つて挾まれねばならぬ、此等の諸國の人が支那に來て佛典を漢譯するに當ては、皆梵語の佛典から翻譯したかどうか。

此問題に入る前に少しく佛教の傳はり方に於て記して置かねばならぬ、印度以外の西方諸國中、佛教に最も關係の深い國は勿論月氏である、後漢書に見ゆる大月氏王閣膏珍（卽ち Kussan 王朝の貨幣に見えて居る Wema 或は Hema, Hima, Oonmo, 卽ち Kadphises II といふものに相當す）以後は中印度の一部をも占領し、北方印度に據つて居たけれども、もとより印度とは其文化に於て相違がある、佛教が印度を北方に出て先づはいつたのは此月氏の國である、いつの頃から佛教が月氏に入つたかはもとより疑問であるけれども、紀元前七十年の頃に Alexandros Polyhistor が書いて居るものゝ中に『當時バクトリアに Σαμανοι あり』といふことが見えて居る、Lassen